

日時:2018年11月3日(土・祝) 13:00~14:30

場所:高野公民館

飛騨の城跡へ行こう！2018 ー古川城と金森長近の城ー

講師:加藤^{かとう}理文^{まさふみ}氏(日本城郭協会理事)

古川城跡

午前中に引き続きましてお話しさせていただきたいと思います。

今日古川城へ登っていない方はどのくらいいらっしゃいますか？

(数名の方が挙手)

それでは、登っていないということを前提にお話しさせていただきたいと思います。

お題は^{かなもりながちか}金森長近です。昨年中井(均)さんが、姉小路の話をしましたので、今日はもう一代新しい金森氏の話をして戴きたいと思います。

まず、今発掘調査を実施した古川城が一体どのような城かということ、今一度確認をさせて頂きたいと思います。

上がってきて最初に虎口を見て、そして斜面の石垣、それから先程区長さんからお話があった^{はまぐりいし}蛤石がある曲輪をそのまま上がって行って、主郭の櫓台を見ていただきました。この櫓台が発掘調査によって、礎石建物であったということが解りました。

位置関係をもう一度確認しておいて欲しいと思います。佐伯さんの作った図が、丁寧に石垣の石材のラインを拾ってくれています。皆さんのお手元にある山城マップ(姉小路編)のパンフレットにも同じ図があります。そのパンフレットから取った図なので、石垣のラインがほぼ推定できます。また最近樹木を伐採したことによって、新しく見えるようになったところもあります。主郭周りには礎石建物の下に、このような石垣が存在する可能性があるということです。石材もありますので、今日見ていただいた所は、



石垣に囲まれた曲輪上の礎石建物ということになります。斜面で検出された石垣を見て戴きましたが、ほとんどが崩れてしまっていると考えていただいて間違いありません。ここから上に、5mはいかない程度で石垣が積まれていたようです。裾だけ石垣が巡っていた可能性が高いということです。次が虎口で検出された石垣ですが、石材を横置きにして虎口ラインの右側を石垣にしています。見せるための意識があったと考えられます。虎口で、見せるために石垣を使っていたこととなります。

それと、蛤石からみた主郭方面に、大きな石があるのをお分かりいただけましたか？このラインというのは、今後調査をすれば分かってくるのですが、石垣で固めていた可能性があります。しかもよく見れば、非常に大きな石を使っていますので、ここに巨石列が並んでいることとなります。大きな石を使うということは「見せる」ための石垣と考えて間違いありません。主郭に対する前面を大きな石で覆うことで、ここからは別の空間に入ることを表していたとも想定出来るわけです。ここから上がって行くと、主郭北西面にも石垣が残っていますので、主郭も石垣が廻っていた可能性が出てきました。ますます今後の調査が期待されます。

礎石の検出状況ですが、5間×3間で並んでいました。こういう形の建物跡が想定されます。1間が約2mだと思ってください。従って10m×6mの建物があったこととなります。その建物については、内側は1間ずつ礎石があるのに対し、外側は半間ごとに礎石を置いていますので、外側が非常に丈夫な構造の柱であったと想定されます。現地でも話をしましたが、5間×3間ありますと二階建ての建物を建てるのが可能だと言われています。そうするとこれは二重櫓の可能性もある訳です。主郭にある二重櫓、別の言い方をすれば「天守」があったということです。そういう建物が今回発見されたと思っていただいて結構です。非常にすごい物が出てきたわけです。古川城は、調査前から石材が散在していましたので、金森氏の手が入っていたのではとは思っていません。それが、今回の調査によって金森氏が改修し、石垣を使用したことが、ほぼ確実な状況になってきたのです。

金森長近とは

金森長近という人はいったいどのような人なのでしょう。金森氏というのは、明智光秀と同じで土岐氏の庶流だと思ってください。なぜ「土岐」が「金森」になったかという、近江の金森村に移ったので、その土地の名前を取って金森氏を名乗ったと言われています。多くの戦国時代の武将たちというのは、今川氏も同じですが、「今川」と言う土地を支配するようになったから今川と名乗っただけで、元々は吉良とか足利でもいいわけです。土岐氏であったわけですが、金森の地を支配するに及んで「金森」氏を名乗ったこととなります。また、信長に従って「長」という字を一字戴いて長近と名乗るようになったとも言われています。永禄2年、信長は突如京都を見たいと言出し、時の將軍あしかがよしてる足利義輝に会いに京へ行きます。その時の供に金森長近が加わっていたと言

われています。

美濃を支配下におさめ岐阜に移った信長は、前田利家を筆頭に自分が可愛がっている武将20名を「赤母衣衆」と言あかほろしゅうって身の回りの馬廻うまわりに選んでいます。ところが、20人目が居なくて19人だったそうです。その後12名を追加することになります。この追加された中に金森長近が入っていたと言われています。つまり、金森長近は信長に可愛がられていた人物の一人だったということになります。長篠の合戦では、徳川家康の家臣・酒井忠次がとびがすやまとりて鷲ヶ巣山砦の奇襲戦を仕掛けます。その有名な戦に、信長の名代として「お前行って来い」ということで金森長近が行っていますので、よほど信長に信頼されていたということが分かります。

天正3年には柴田勝家の与力、要するに信長の目付として越前一向一揆平定戦にあたっています。前田利家とか佐々成政とほぼ同格の扱いです。この時、大野城攻めで戦功があったので戦の論功行賞として大野城主となったわけです。

本能寺の変以降は秀吉に従って、天正13年(14年とも)飛騨1国、3万3千石とか3万8千7百石とか言われますけれど「飛騨一國」を与えられました。長近は、武辺一辺の人だと思われがちですが、実は千利休と仲が良かったり、古田織部と仲が良かったりして、蹴鞠はたいそうな腕前だというようなことを書いた記録も残ります。教養人ということで、文禄3年には秀吉のお伽衆を務めることになりますので、文化人として認められていたということです。

最終的には5万石程まで増封され、飛騨高山を治める城主になるのですが、自分はずっと京都に居て遊んで暮らしています。非常にいい身分だったと思います。85才で亡くなっていますが、今でいうなら100歳くらいまで生き、非常にいい人生を送った人だと思います。

天守台の無い高知城

その金森長近が若かりし頃、古川に来ていろんなことをやっているようです。金森長近はかなり変わった城を作っています。彼が造った城は、どれも物凄く変わった城です。

ではなぜ、一番初めに高知城を出したかという、この城は天守台の無い城なんです。外から見ると天守台に見えますよね。天守台の上に天守が建っているように見えますが、実は曲輪内から見ると天守台がありません。天守が、地面の上に直接建っています。高知城は、天守台を持たない城なのです。

天守は、巨大建築ですので雨落ち溝が無いと大変なんです。高知城は、小さな天守でありながら、雨落ち溝は、かなりの規模を持っています。特に御殿と天守の屋根が重なるので、相当の雨が落ちてきます。従って、巨大な雨落ち溝を作ったわけです。話がそれましたが、高知城は外から見ると天守台に見える石垣がありますが、これは天守台の石垣ではなくて、本丸の石垣です。本丸の石垣の一部を天守台に利用しているだけなのです。豊臣大坂城もほぼ同じ構造ですが、大坂城は曲輪内にも、ある程度の高さの石垣があります。豊臣政権が作った天守は、基本的に曲輪角地、隅の方に建てられていることが非常に多いです。隅に建てた場合、内側に石垣を作るものもあれば作

らないものもあります。金森長近が築いた天守は、内側に石垣をつくらない例が非常に多いですね。高知城はそういう古い形で残っている好例ということです。高知城の建物は1747年完成と非常に新しいのですが、石垣そのものは慶長段階1600年ちょっと過ぎた頃作っていますので、1600年初めの段階でも天守台を持たない天守が残っていたとご理解戴けたらと思います。

天守台を持たない越前大野城

金森長近が最初に与えられた越前大野城という城ですが、小高い山の上に天守が建てられました。遠くから見ると飛騨古川城に似ています。現在の天守は、昭和43年に鉄筋コンクリートで推定再建されたものです。この大野城を描いた絵図が名古屋の蓬左文庫に残っています。「大野城石垣并長屋門破損之覚図」という絵図です。天守、天狗之間、小天守の建物が一連の建物として描かれています。今も石垣は、きれいに残っていますよね。絵図を見てください。どう見ても皆さんがご存知の天守の形ではないですよね？名古屋城天守とか大阪城天守とかと全く違う建物だということがお分かり頂けると幸いです。

織田政権の武将達、特に信長に可愛がられた武将たちにとって「天守」とは、安土城もしくは岐阜城を指すと思っていたのでしょうか。みなさんが想像する天守、姫路城の天守と同じような天守はいつ出てきたのかというと、天正の終わり頃、信長の安土城の完成と共にああいう形態の天守が世に普及していく訳です。それ以前については、おそらく岐阜城の信長の居館、それは3階建てもしくは4階建ての楼阁建築、それが天守だという意識があったのではないのでしょうか。例えば金森氏、前田氏、柴田氏などは、領地をもらった時に、信長から天守を建てなさいと言われたか、あるいは信長に天守を建てても良いかと尋ねて許可をもらったのだと思います。それは3万石程度が境だと思えます。3万石以上は天守構築許可を与えていた可能性が高いと思います。金森長近は、上様(信長)から許可を頂いて石垣を築き、天守を築いたということです。その天守というのは、私たちが想像するようなシンボルタワーではなく、本丸で一番大きな建物もしくは一番高い建物を当時「天守」という呼び方をしていたのではないかと考えられます。柴田勝家の北ノ庄城は九重の天守はと言われ、9階建てだと通常認識してしまいます。しかし、下から上がっていったら9階というだけであって、一つの建物が単体で9階ではないかもしれないと、金森長近の城を見ていると思ってしまいます。入り口に入って、5階分上がる建物なら、それも天守という認識だったのではないのでしょうか。只、現在残っていないので分からないのです。唯一の資料は蓬左文庫のこの絵図だけで、僕たちが認識できない天守というのはこの資料だけです。だから推測するしかない訳ですが、結構こういう建物は当時多く見られたのかもしれませんが。それとも、金森長近の独自性なのでしょう。

この絵図をよく見ると、天守は石垣に全く乗っていません。石垣に全く乗っていない天守、そこに小天守が付設しています。それから天狗之間がありますが、天狗之間だけが石垣に乗っていて地下に穴倉があります。なぜか、これが一番天守に近い建物ですよね。天守は、石垣の天場一杯は使っていません。石垣は使わずに真ん中にぽつんと建っています。従って、空白の部分がものすごくあります。建物が何も無い空白の部分です。空白にしないで、何か作ったらどうかと言いたくなりますよね。ここまで作れば良いと思うのに作っていないんです。なぜかと言えば、絵図ではまっすぐに描いてありますが、実際の石垣はこんなに曲がってます。こんなに曲がった石垣の上に建物を建てることは困難なので、建てるのをやめてしまったのでしょうか。突き出しても良かったのですが、より変な形

の建物になってしまいます。建てるためには、ここを懸造りの建物にしないといけないわけですが、懸造りの建物にすると耐用年数が著しく劣ってしまうということと、おさまりが悪くなってしまいます。耐用年数に問題がある建物は普通造りません。耐久性と手間を考えたら、四角形を作っていくのが一番なんです。従って、天守台の形状にとらわれずに、四角形の建物を作っていた結果、空白地帯が生まれてしまったということなんです。

なぜか金森長近は、この形の城をその後も作っていきます。長近は、これが「信長が好みの城」だと思っていたわけなんじゃないでしょうか。信長に可愛がられた人たちは、信長信奉者であり信長の言うこと以外は聞かないわけなんですよ。だから森(長可)が秀吉に従った後、小牧長久手合戦では、あえて死地に向かうような戦い方をしてしまうのでしょう。彼らにとって、信長のいない世界を生きていてもしょうがない、秀吉に仕えるくらいならこのまま死んでもいいと思ったんでしょうね。ああいう最期を遂げたのも、長可にとっては幸せだったのかもしれませんが。彼らにとって信長が全てですので、信長に言われたものをそのまま踏襲していった可能性は、かなり高いと思います。

天狗の間の南西隅の石垣なのですが、見ていただくとここは当時のままのようです。天正期の石垣として間違いないと思うのですが、こちら側はほとんど積み直しされています。特にこの上は、今の建物を建てる時に積み直しをしたと思います。隅角部は残っているので、ここが天正段階、金森段階の石垣でいいと思います。

次に小天守のところですが、ここに空白地帯があります。現在の建物でも天端一杯に作る事ができなかったわけです。天守台東面の段築の石垣が残っていますが、積み方としては古いので、ある程度の石垣は当時の物でいいのかなという感じを受けます。一段、二段、三段になっているのは、一気に高さが積めないからでしょう。だから段築になったのです。この高さは2mちょっとくらいですよ。同様に、先程見ていただいた古川城も、おそらく一気に上までは詰めないと思うんですよ。斜面を石垣にするには、段築状の石垣を採用するしかなかったわけです。入口の所もそうですよね、石材を使っていますけれども非常にアンバランスですし、高さがありません。だけど石垣で斜面を覆おうとなると、当時の技術では段築にするしかなかったということになります。江戸時代のように、上まで一気に立ち上げることができませんので、こういう形になったのです。東より見た写真ですが、ここまでの高さが当時としては、精いっぱいなんです。その上にもう一段、その上にもう一段と、何度も段を積み上げながら、一番上の天守曲輪を作っているということになります。

石垣を見てみると、上に行けば行く程積み直しを受けていることが解ります。だから天守台いっぱいまでの建物が建てられないのです。従って、何も無い空間ができてしまったのです。おそらく、石垣を積むに当たっては、こういう積み方をしないと積めないでこういう積み方になってしまったと思われる。天正段階では、四角形、長方形といった90度の角を持つ石垣がまだ積みなかつたと思っていただければいいと思います。90度の石垣を積めないで、アンバランスな形になっ

てしまったということですね。

総石垣で固めた飛騨松倉城

次に、飛騨松倉城という城跡を紹介したいと思います。図面を見ていただくと分かりますが、確かに石垣の隅が90度じゃないんですよ。まだ90度に積めないんですね。犬山城に行ったことがある方は多いかと思いますが、あそこも90度じゃないんです。90度の所は一つもないですよ。だからまだ90度に積める技術が無い時代に積まれた石垣だというご理解をいただけたらと思います。犬山城と同じで松倉城を築いた時は、まだ90度に積めないのです。台形にしつつめない段階の石垣で、この上に建物を建てています。これが三の曲輪の南面の石垣ですが、当時の積める石垣の限界の高さでしょう。同じようにこれが主郭の外郭南西面の石垣ですけど、この隅の積み方を見ると石材を長短長短…という算木積みといいますが、その算木積みになっていない段階だと良く解ります。

その算木積みがいつ頃出て来るかという、関ヶ原合戦の後だと思っていただけたら結構です。関ヶ原合戦前にも算木積みを志向する石垣はありますが、基本的に関ヶ原合戦を過ぎないと完全な算木には変化していきません。石垣名人と言われた加藤清正が、算木積みの石垣を積むのは、名古屋城の手伝い普請の時が初めてじゃないかと思います。清正は世の中が算木になったあとも、算木を積みません。それほど自分が構築した石垣に自信を持っていたのだらうと思います。「算木より俺の石垣の方が強いよ」という自負があって、世の中が算木になっても全然算木にしません。本当に清正の石垣は強かったのでしょうか。それがこの前の熊本地震で証明されました。清正の石垣は一つも崩れず、その後の石垣は崩れてしまったのですから、清正の積み方が強かったと図らずも証明されてしまったのです。それとほぼ同じ時代の石垣ですね。ここは算木にはまだなっていません。時代的には、天正のどこかあるいは文禄期だと思います。

石垣が登場してくるのはいったいつ頃のことなのでしょう。皆さんが思うような石垣と言うのは、織田信長もしくは豊臣秀吉の配下の武将が入ってこない限り登場してこないんです。在地の技術では、高く積めないからです。石を積み上げることはできても、高くはできないのです。もう一点は石垣の上に建物を建てることは、信長と秀吉の部下でないと技術的に出来ないのです。だから、石垣を積んでこの上に建物を建てるとなると、どう考えても金森長近以外に今の所考えようがないんです。もしくはもっと新しい時代の石垣と考えるかなんですが、この積み方を見たら慶長までは下がりません。おそらく文禄のどこかか、慶長の始めで、関ヶ原より後には行かない石垣です。だから金森長近としか考えようがない訳ですね。この積み方なんか見ると、今日見た古川城の石垣と全く同じだと思いませんか？大きさは違うものの、上がってくる入口部分は、今日皆さんが登った古川城と全く同じです。石材の長辺側を横に置いていく置き方見ると、大きさそのものは違っていますが、石積みの思考は古川城と全く同じです。従って、この石垣も金森長近だと考えるの

が自然なんですね。古川城も松倉城も金森長近が信長の思考を引き継いで、石垣を持ち込んだと考えられます。

本丸の南東隅ですけど、やはり算木にはなっていません。そして石墨が廻らしていますが、非常に大きな石材を使っています。北東隅もやはり整っていません。隅が90度にならない石垣を使っています。下から見ると隙間がいっぱい見えます。後々になると、隙間が出ないように石を加工するんですけど、この段階ではまだそこまで技術が発展していないということです。仕方ないから隙間を小さな石で埋めることをする時期だと思います。

天守台ですが巨大な空間があります。この上に天守が建っていたのですが、僕達が想像する建物とは違うかもしれないということは先ほどお話をしました。はっきりしたことは、ここの調査をしてみないと分かりません。二の丸から見た本丸ですが、かなり高い場所に建っていることが解ります。ここに天守が建っていたわけです。

佐伯さんが復元考証をして、香川さんがイラストを描いている(松倉城の)推定復元図ですけど、主要部を見て頂くと総石垣で、瓦は未検出ですので屋根は檜皮もしくは板葺にしています。城郭専用の瓦の出現は、信長の安土城が最初で、それ以前の城に瓦が葺かれていたとしてもそれはお寺の瓦を転用したのです。城郭専用の瓦ではありませんでした。この時代の瓦は寒暖差に非常に弱いんですね。飛騨みたいに朝2~3℃で、昼間に20℃になってしまうような所では割れてしまいます。おまけに雪が降る所はダメですね。瓦は使えません。使わないので檜皮もしくは板葺にするか、石製瓦を使うことをするわけです。時代が下がって江戸時代になると金属瓦に替わったり、釉を塗った瓦に替わったりしていきます。それは割れを防ぐためです。

イラストで見ると分かりやすいですね。主要部だけ石垣。こうした城を作れるのは、豊臣か織田しかありませんので、自ずとこの石垣を誰が作ったのか分かってきます。

金森長近の養嗣子・可重の居城・飛騨増島城

次に、こちらのすぐ傍にある飛騨増島城です。これもまた変わった城です。石垣が書かれていますが、これがまたよく理解できない。

この石垣上一杯に建物は、建てられません。さっき見ていただいた越前大野城のような建物を想定するしかないのですが、石垣はまっすぐ積まれた新しい時期の石垣になります。

石垣が新しい・古いかの見分け方は、石材が加工してあるか加工していないか、次に角が90度になっているかなっているかないかです。それと石垣が直線か直線じゃないか。石垣がきれいになればなるほど時期は下ると思っていた方がいいです。逆にいえば、汚ければ汚いほど時期は古いということです。この角を見ると短長短長と積んでいますので、もう少し年代は下がってきます。越前大野城や飛騨松倉城と比べたら、もう少し年代的には新しい時期の石垣の積み方です。

結構きれいに左右に割り振っています。きれいに割り振ってあればあるほど、石垣は新しくなります。ここは全部積み変えていますよね。積み替えか積み替えじゃないかどうやって見たら分かるかという、斜めに積んでいるのが見えますか？お城の石垣は斜めには積みません。こうなのは明治以降の積み直しです。斜めに積んである石材があったら明治より後だということです。お城が有る時代に、斜めに積むこともあります、幕末近くのことです。今NHK大河ドラマで「せごどん」をやっていますが、せごどんが活躍する時期ならあってもおかしくありません。むしろもっと新しいと考えた方がいいと思います。でも石材は古いのを使っているの、元々あった増島城の石材を使って積み直したのでしょう。古い石材を使っていますので、元々石材がここにあったことが解ります。この斜めの石、こういう置き方はしませんので、ここから下は元々あった石材を利用して積み直していると思います。

天守台いっぱい大きな天守は建ちません。従って、この中(櫓台)の一画のどこかに建物を建てて、天守と呼んでいたわけです。それは最初に見ていただいた越前大野城と全く同じ考え方だと思います。おそらくこれが金森の城の特徴なんだろうね。ここをわざわざ突出させる必要は全くなく、まっすぐ積んだ方がいいと思います。ところがわざわざ突出させているのは、後の改変なのか、はじめから意図して積んだのかが分かりません。現状の石垣を見る限り、ここを突出させているということです。

特異な本丸構造の飛騨高山城

最後に見て頂きたいのは高山城です。金森長近が、最後に築いた居城になります。天守がどこにあるのか解りますか？皆さんお分かりになるとと思いますが、高知城と同じです。天守台はどこですかと聞かれたら、図面が残っていなければ答えられないですよ。天守台が無いわけですから。確かにここが天守台と言われれば天守台かもしれないです。この入母屋の建物の上に望楼が乗っているのが天守なんです。じゃあこの建物は何階建てですか？と聞かれたら何て答えますか？一階、二階、三階建てでひょっとしたら地下もあるかもしれません…高低差があり過ぎですので、もう一階地下があるかもしれません。そうすると四階建ての建物が考えられます。

私たち日本人は1, 2, 3, 4といった時に「4」という数字は「死」に通じて縁起が悪いと言いますよね。だから4という数字はあまり使わない。外国人は、4は幸福を呼ぶ数字なんです。4がなぜ幸福かという、旧約聖書に出てくる幸福な単語はほとんど4文字なんです。皆さんが知ってる言葉で言うと、たとえば「LOVE」です。L、O、V、Eで4文字じゃないですか、だから4と言う数字は縁起の良い数字なんです。日本は死に通じて良くないと言いますが、そう言われたのは明治過ぎ大正とかじゃないですか。江戸時代は全然言いません、むしろ三より大きくて良いと言う意識があったようです。例えば天守は通常三階建ての建物になります。そうした中、石高の非常に高い大名は、姫路城や名古屋城のように、五階建ての天守が構築できたわけです。3の次が5になる

わけですけど、自分は3より力はあるけど、5まではではないという時に4を使うんですね。大垣城や大洲城天守は四階です。津山城も五階に見えるけど、四重目の屋根は腰屋根で数えませんので四階の天守です。四階の天守が多いのは、5までの格式はないけど、普通以上だと領民に訴えたい場合、4を使うわけです。それが四階建ての建物なんです。

小田原城天守はいい例です。外から見ると三階ですが、中に入ると一階部分が二階建てですので四階建てになります。わざわざ一階の階高を高くして、ここに一つ階を設けて四階にするわけです。とにかく三よりは、四がいいのです。

高山城の建物を見れば、あえて望楼を付ける必要性は感じられません。だけど、金森長近は無理をしてでも天守を建てておきたいのです。それは、5万8千石の石高を持っているからです。5万石の権威を示したかったのでしょう。そこで、御殿の一部を使って、御殿上に望楼を乗せて天守にしたわけです。この時期になると、まっすぐ石垣を積むことが技術的に可能になります。また、すべての建物を石垣の天端一杯に持ってくるができるようになります。それでも地形に左右されて、斜めに欠けてしまう場所もあるわけです。また、石垣から飛び出した建物も出てきます。しかし最初に見ていただいた越前大野城のような空白部分はほとんどなくなります。外から見ても空白だと解る部分は、ほとんどなくなります。只、庭として使う空白部分が内部にできてきますけど、これは外からは見えません。中に入った人たちが見るための庭になるわけです。関ヶ原合戦後に、城郭建築技術は急激に進歩したということです。

まとめ

金森長近は、最初に築いた越前大野城を基本にして、様々な城を築き上げ、最後に飛騨高山城でほぼ完成形態の城を作り上げました。金森長近の作った城は、越前大野城から高山城まで全く構成が変わっていません。この間に作った松倉城も古川城も、こうした形式の城であった可能性が高いということです。

古川城の主郭に5間×3間の建物がありましたが、主郭は一段高くなっています。「この段差って何もしてないですけど何ですか？」って質問を現地で受けました。先程見ていただいた櫓台の部分で、ここが本丸部分だとして、一連の建物が連なっているとしたら、あそこに石垣がなくてもいい訳です。あそこが建物の中であれば何の問題もないことになります。金森長近は、そうした城をこだわって作ってますので、古川城もそれと同じ可能性も無きにしも非ずなんです。今回、古川城の最奥隅にこういう建物が出てきたのは極めて象徴的だと言わざるを得ないのです。松倉城も同じように本丸の中の空間を使って建物を建てていたとしたら、よく似ているんですよ。松倉城に存在するこの空白部ですが、佐伯さんは柵や塀で囲っています。通常は、柵か塀で囲みますが、ここは塀が無くていい訳です。余分な空白を作るという金森長近の特異な部分かもしれないわけです。そう考えれば、先程見て頂いた(古川城の)5間×3間の建物の南側に何も無いのは金

森らしいと言えるわけです。余分な空白があるということが金森築城を裏付けるということです。金森長近の城には必ず余分なスペースがある。いわゆるデッドスペースを持っているのです。それは金森氏が使っている工人の癖なのか、金森自身の癖なのか分かりませんが、そういうデッドスペースを使っているということが大事な特徴です。これから小島城も調査をしますので、更に様々なことが分かってくると思います。デッドスペースをいかに上手く使うのか、それともそのまま空けておくのかということが、非常に興味深いと思います。

あと城というのは、ここに城の中心部があります、以前の土の城の時は、このようにしてこっち（尾根先の地区）も使っていたのですが、石垣の城になった時点で石垣に変化する場所と変化しない場所が出てくる場合があります。土の城で使用していた曲輪が、石垣に変化しなかった場合、その曲輪はどういう使い方をされたかを考えてみたいと思います。一つは新しく石垣にした部分だけを使い、前からあった部分は完全に捨て去って使いませんと言うケース。もう一つは、新しく作った石垣の部分に中心は移しますが、前からあった土の城の部分についても、建物等を作って部分的に使用しますというような使い方の二つに分かれます。それは、どこを基準に二つに分かれるのか全く分かりません。

福岡城主となった黒田氏を見てみましょう。筑前鷹取城を総石垣に直した時に、主郭の周り全部を取り巻いていた前段階の畝状^{うねじょうたてぼり}堅堀を全く使っていないのです。このように近世の石垣の城にした時に、土の城の時に使用していた防御を全く切り捨ててしまうこともある訳です。石田三成の作った佐和山城は、やはり中世部分は殆ど捨て去っています。しかし、この尾根筋の突端部だけ櫓を作って使用しています。これはケースバイケースなので調査等をしないと分からないわけですが、石垣化した時に中世段階の曲輪部を捨て去ることが多いのです。石垣の城に変化した時、使う所と使わない所に分かれることがあったと覚えておいていただけるといいと思います。

もう一つ、石材ですが、基本的に石垣の石材はその山からの調達が普通です。松倉城の場合は尾根続きの場所にある石材を使っています。古川城も石垣の石材は、基本的には周辺もしくは城のある山で採れた石を使っています。例外的に運んでくるのは礎石だけなんです。礎石は柱を立てますので、なるべく平らな石の方がいいのです。平らじゃないと石を加工するか若しくは木材を加工しないとイケませんので、面倒なのです。少なくとも建物を建てる礎石については川原石みたいな石を下から運んでくることもあるということです。

そういうことを金森長近はずっとやっています。高山城は、絵図を見ますと石垣だったのが分かりますが、今ほとんど残っていません。ほとんど取り去られてしまっています。どこかに運ばれたのかあるいは運ばれなかったのかは分かりませんが、ほとんど残されていません。

（このように）石垣が少し残っていますが、あやしげなんです。これいつの石垣ですか？と聞かれると返答に困るんですね。「うーん石垣ですねえ…」てなもんですよ。いつなのかと言われると極めて困る石垣で、よく分からないんです。積み直しているのかも知れないですし、案外横目地

が通っていますので当時のままかとも思えます。ちょっと斜めになっていたりして、非常に時期決定が難しい石垣なんです。でも石材は残っていますので、元々あったのは分かります。

これなんかは大丈夫でしょう、大手門に残っている石垣と、それからこの石垣です。算木積です。新しい時期の石垣だと思いますが、金森長近が慶長年間に積んだとしても全く問題が無い石垣が残されています。そうする飛騨に残されている石垣は、殆ど金森だということです。

岐阜県に残る石垣の大部分は金森氏か森氏です。森氏っていうのは森蘭丸の「森」です。両氏とも古くから織田家臣という共通項を持っています。織田家臣であるが故に、ここまで石垣にこだわるのでしょうか。徳川なら割りあい簡単に諦めますよ。石材がないから、しょうがないって感じで…だけど織田だと石材が無いと、どこからでも集めてこようとします。どこかに石材はないかと探し回って墓石であろうと石材として集めてきます。全部石垣にしなくても最重要箇所には必ず石垣を使います。それが織田、豊臣なんです。徳川はそこまで求めません。そこまで求めなかったからこそ、徳川の代が続いたのかもしれませんがね。別に無くても同じ城だという感じです。

その徳川の時代になっても石垣はそのまま使用しています。ただ、崩れたりすると、直さないといけないのです。直すと莫大な費用になります。そうすると、自分が住んでいるのはもう山麓です。上のほうはもう捨て置けとなる訳です。そうすると上の方の石垣は崩れているけど誰が行くわけでもないし、今自分が生活しているところは山麓だから、下だけしっかり直しておけば良いということになってくるわけです。江戸時代も半ば以降になると藩の財政も良くない訳です。徐々にそういう傾向になっていきます。ここ(高山城)も周りに凄い石垣があったと思うのですが、今は土に覆われてしまっているだけかもしれません。だから発掘調査をすれば凄い石垣が出て来る可能性はあります。現在は土に埋もれた上部のみ少ししか見えないというさみしい状況です。

(高山城の)本丸上段天守の跡は、今こういう状況です。こちら側から見ると、天守台が無いので全然分かりません。さっき見て頂いた高知城と同じです。高知城は、江戸時代からずっと残っているので天守だと分かりますが、もし図面もなく絵図も無くて、石垣だけしか残ってなくて、記録に天守台って書いてあるだけだとしたら、天守の位置は解らないと思います。誰も確定できないと思います。

高山城もそうですよね。天守台の上に天守が建っている絵姿が描いてあるからこの上に天守があったと分かるんですが、その天守の痕跡を示すものは現地に何一つ残されていません。それが金森長近の城の特徴で、ある意味極めて難しい城です。現地には、金森氏入部当初の石垣も部分的にはありますが残されています。極めて少ないですが、ここは大丈夫かなと思う石垣には矢穴が入った石材が時々混ざっています。もう少し矢穴が大きいと申し分無いのですが、矢穴の入った石材がありますので、飛騨高山城についても金森氏が石垣を持ち込んだとして問題ありません。

今日見ていただいた古川城があそこまで石垣があるとは全く思っていませんでした。山城マップ

(姉小路)の古川城の次のページにある(小島城の)写真は完全に石垣の城です。古川城より小島城の方が凄い石垣を使っています。そうすると金森氏が、凄い石垣の城を飛騨の地で作っていることになります。今までそんな認識をしていなかったのが、金森長近の城と言えば越前大野城、高山城、松倉城の3城だけだと思っていました。その中で一番の石垣の城が松倉城だと思ってきたわけです。ところが今回の発掘調査によって簡単にそれが覆ってしまいました。古川城も小島城も石垣だったということが分かったわけです。それによって何が重要かと分かったかと言えば、国司・姉小路氏が治めていたところに新たに金森氏が来ました。その金森長近と言う人が古川に入った時に、前の国司が使っていた城に入りました。その時に城の形を大きく変えてしまったのです。これが織田政権のやり方ですね。織田・豊臣政権というのは、前の支配者の城に入るとその城の姿かたちを全く変えてしまうのです。そこに住んでいる人たちに今度来た殿様は今までのお殿様と違って、とんでもない城を作る技術を持っているよ、凄い短期間で見たこともない城を作ったよということを見せようとするわけですね。金森長近は、古川に入ってすぐ城を遷しますので、古川に礎石建物を作ったり、石垣を作ったりしたのです。むしろ次の城を石垣の城とした方がいいのに、入ってすぐに石垣の城を作るということは、力を示したい、ひいては政権が持っている力を示したいということです。

もう一つ言えるのは、簡単に石垣の城を作るだけのお金と技術者を持っているということです。織田政権の強みはいったい何なのかというと、それはとても金持ちだということです。信長をはじめとして、羽柴秀吉、柴田勝家、前田利家とか皆さんご存知のいろんな武将がいますが、みんな金持ちです。彼らは非常にお金を儲けることが上手く、商業政策やいろいろな事をやりながらお金を儲けている。それは信長がこうしろと言うからだと思うのですが、それにしてもお金儲けが上手い。お金がたくさんあるのであつという間に城ができるのですよ。

ぼくもお金があれば、次から次へ家が建てられます。一人住まいの時は小さな部屋でいいですが、結婚したらもうちょっと広い家が欲しいな、じゃあ引っ越そうか、お金があればできます。そこで子どもが生まれる。そうするともうちょっと大きな家に引っ越そうか、お金があれば引っ越せます。残念無いんですよ。そして子どもが巣立ちました、また夫婦二人に戻りました。そしたら大きな家はいらないですよ。あれば大きな部屋とか掃除するだけ邪魔くさいです。もうちょっと小さな家に引っ越したいと思ったら、お金があれば引っ越せます。お金が無いとそのまま居るしかないですね。そして最後は、ある程度歳をとったら駅前の交通が便利なマンションで良いです。お金があつたら引っ越します。お金が無いから引っ越さないだけです。だけどそれが自由にできるのが織田なんです。それができないのが姉小路、いわゆる前からの国司はお金が無いのでそれができないのです。国司家っていうのは元の城から何があつても動かない。だけど織田の武将達は、新しい城をどんどん作っていくわけです。わずか一年しかいなくても城を作ります。何千万かけようと何億円かけようと作るのです。それはお金に余裕があるからなんです。そういう形で新しい城を作

っていったことが今回非常によく分かったのです。

今日見てもらった古川城はひょっとしたら越前大野城のような城だった可能性があるのです。金森長近の城の上屋構造は、分かりづらいですね。

高山城は、全てが建物です。空地がありますが、中庭です。外から見たらこんなところに空地があるなんて分かりません。全てにわたって建物が建っているように見えるわけです。だから僕たちが(古川城の所で)見たのは、ほんの一部だったかもしれないのです。実はこっちは何も無かったよと言っていますが、いやいや調査したら全部建物だったってことも金森の場合あることなのです。金森の城はある程度大きな面積を調査しないと分からないということなのです。

今まで漠然と金森長近は、越前大野城や高山城、松倉城など結構得体の知れない城を作っているとは思ってはいたのですが、まさか古川城でも同様の作り方をしているとは思っていませんでした。今回の発見は、天守台は無いものの(天守風の)建物が建っていた可能性が出てきたということです。今回の発掘調査はとんでもない成果があったというわけです。金森長近の城っていうのは掘れば掘る程分からない。だけど掘れば掘る程魅力的な城だということが今回お分かりいただけだと思います。これから先も調査が進みますので、来月の小島城の調査も皆さま是非注目してください。この古川の町の中に金森氏の凄い城が幾つか点在していて、それがやがて国指定になり整備されるようになれば、もっと凄い物が見られるのかもしれませんが。城というのは下から見えないと意味が無いのです。下から見えてなんぼの世界ですし、上から見たときに町全部が見えないと意味が無いのです。そのように見える所に城を作っていますので、古川城や小島城の整備は、両方から見えるようにしないとイケないわけです。コンクリートの建物を建てるとかそういうことではなく、ある程度木を切ってお互い、上からも町が見えますよ、下からもあそこが城だよと教えてあげることができるのが理想です。それこそが金森長近があそこに城を作った理由なのです。「新しく来た殿さまは、あそこに住んでいるよ。」とみんなが見える所に城を作りたいのです。そして殿さまは一番上から見て「これ全部おれの領地だ」という形で見たいってことだけです。そういう意味では極めて良い所に城が有ると思います。まだ行ったことが無い方がいたら、是非一度足を運んでいただいて、上からどういう形で自分の家や町が見えるのかを見ていただきたいと思います。

これで今日私が用意してきたものは終わりです。大変貴重な城ですので、これからも見守っていただいて、残して行っていただけるとありがたいなと思います。

本日はどうもありがとうございました。

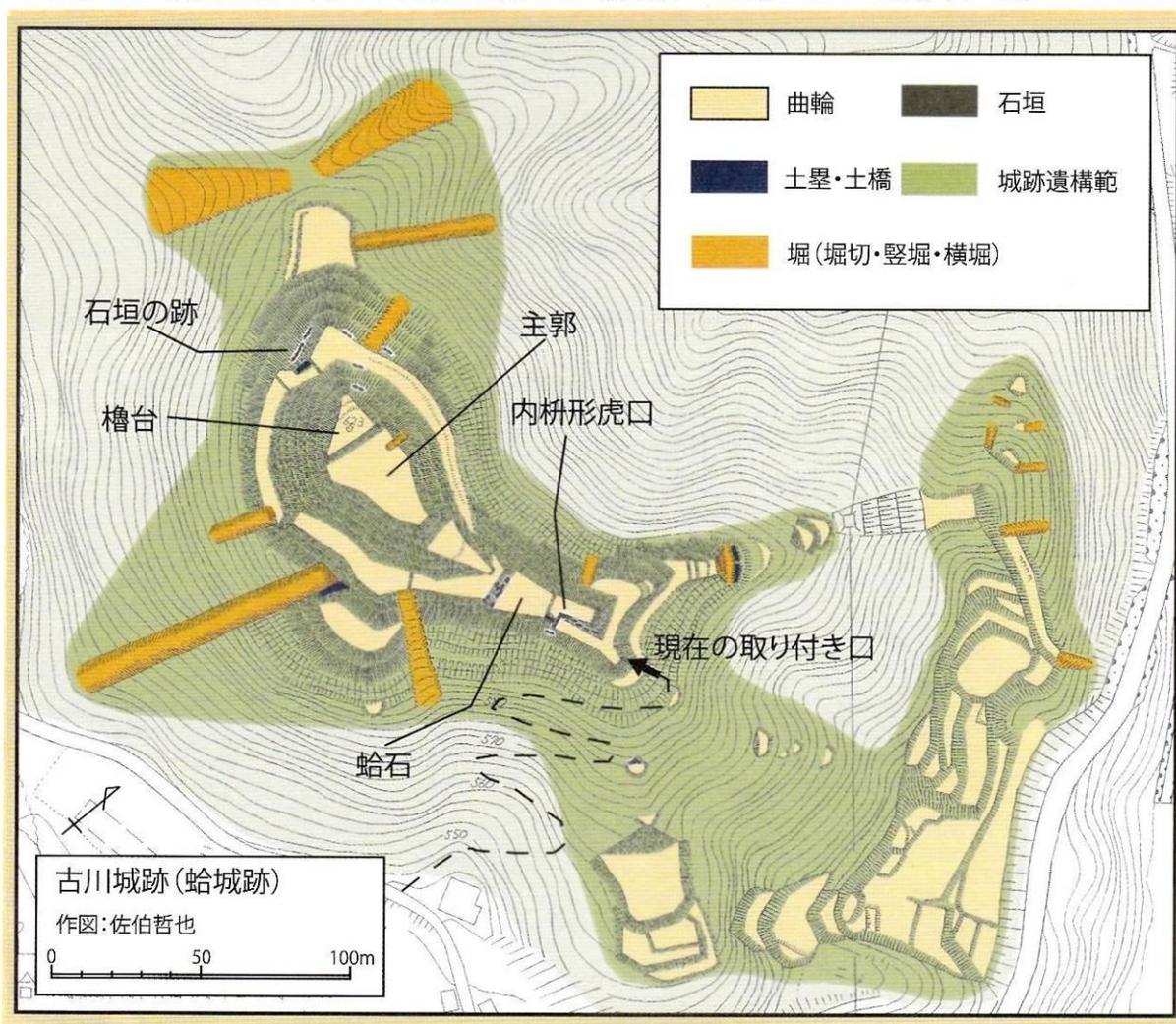
古川城と金森長近の城

加藤理文（日本城郭協会）

於：高野公民館

1 古川城跡

宮川左岸の標高629mの山頂に位置し、中世古川の中心集落上町遺跡を見下ろす場所でもある。東西に津連なる山塊を利用し、階段状の曲輪によって構成する。



第1図 古川城跡概略図（作図：佐伯哲也）

〈歴史〉

「飛騨市山城マップ（姉小路編）」より

姉小路氏は、代々飛騨国国司家であったが、室町幕府より派遣された飛騨国守護の京極氏に敗れ、一族も小島城を本拠とする小島家（宗家）・古川城を本拠とする古川家（古川氏）・向小島城や小鷹利城を本拠とする向家（向氏、向小島氏とも）に分裂してしまう。その後、一族の内紛に利用し京極氏の家臣・三木良頼が古川家の名籍継承を朝

廷から認められ、古川城を領することになる。これが戦国大名・姉小路氏である。

天正13年(1585)、金森可重は、養父・金森長近と共に、飛騨平定戦で活躍し、戦国大名・姉小路氏を滅ぼすと、出雲守任官され、古川1万石の城主となった。翌年、古川対岸の増島城が完成すると、古川城を廃し移ったと言われる。

〈城跡の構造〉

最高所に本丸を置き、西端に櫓台状の高まりが見られる。試掘調査により礎石建物が検出された。この主郭を取り巻くように帯曲輪、東下に向かって階段状に曲輪が配置されている。主の周囲の切岸は、圧倒的規模で石垣が利用されていたことも想定される。東側下段に位置する曲輪群は石垣が散見され、かつて石垣である可能性が高まった。また、蛤石の所在する曲輪へは、石垣を利用した通路が確認され、その周囲も石垣造りである可能性が高まり、金森氏による改修の痕跡と推定される

2 金森長近とは

金森氏は、土岐氏の庶流と伝わる。美濃から近江の金森村に移り、金森氏を称す。織田信長に仕えて諱の一字をもらって「長近」と改名した。

永禄2年(1559)、信長のお忍び上洛の供に加わる。永禄10年以降、馬廻衆の中から赤母衣衆20名(実際は19人しか選ばなかった)を抜擢。次いで、12名を追加。この追加組に含まれた。



第2図 金森長近像(高山城址)

長篠合戦では、酒井忠次率いる4千人の鷲ヶ巣山砦攻撃兵に、信長名代として参加。

天正3年(1575)柴田勝家の与力(信長の目付)となる。越前一向一揆平定にあたり、大野城攻めで戦功、大野城主となる。

本能寺の変後、羽柴秀吉に仕え、天正13年(14年とも)、飛騨1国(3万3千石、3万8千石とも)を与えられる。当初「鍋山城」へと入城するが、後に「高山城」を築き移住。千利休、古田織部と親交があり、蹴鞠もこなす風流人であった。文禄3年(1594)秀吉の御伽衆を務めることになった。

関ヶ原合戦では、養子・可重と共に東軍に属し、戦後2万石余を加増され「飛騨守」となる。晩年は、剃髪し「素玄」と号し「金森法印」と称され、慶長13年(1608)京都伏見に没す。享年85歳であった。

3 天守台の無い高知城

極めて特異な構造を持つ天守 … 創築は慶長初期

- ①本丸から東側に突出した石垣の北面を利用
- ②他の三面に石垣は見られず、直接本丸平坦面から立ち上がる建物
- ③本丸の敷地面積は狭く、御殿の殿舎は3棟（正殿・本丸式台廻り・納戸蔵）のみ
- ④北東隅に天守、L字に西に本丸式台廻り、南に正殿が位置



第3図 内側から見た高知城天守一階部分

4 天守台を持たない越前大野城

現存しないが、延宝7年（1679）、石垣と門の破損を修復するために、江戸幕府に提出した「大野城石垣并長屋門破損之覚図」（蓬左文庫所蔵）に描かれた姿

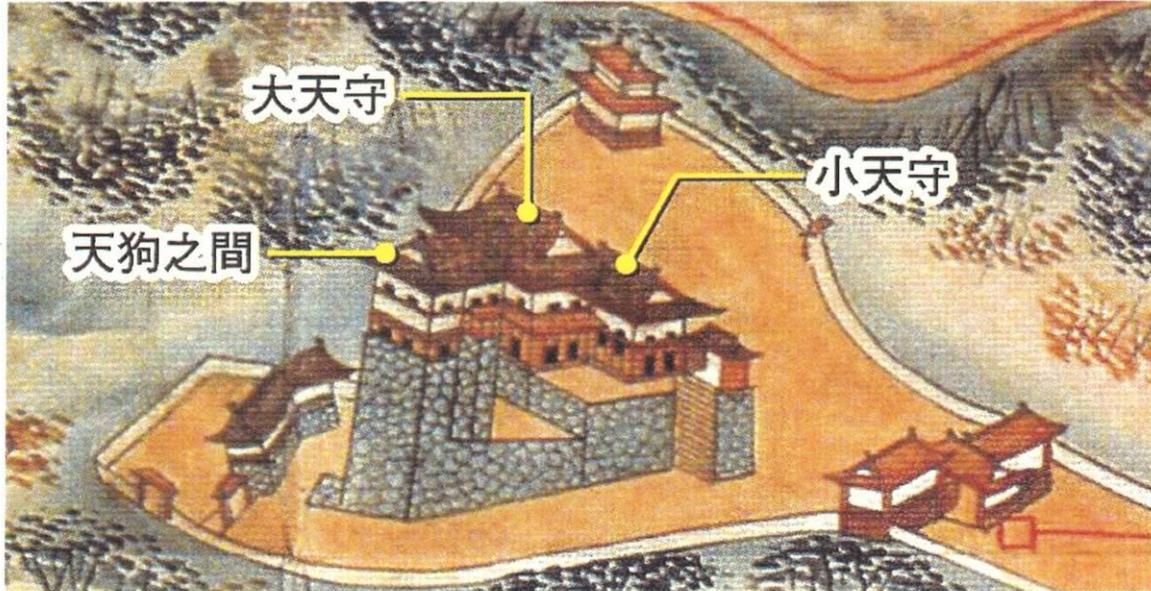
その後「天守」と総称される建物と比較すると、余りに異様 ⇒ 天正期の初期天守の中には、このような形式の「天守」が存在した可能性が高い

〈歴史〉

天正3年（1575）織田信長より、越前大野郡の所領を与えられた金森長近は、当初朝倉景鏡の居城であった戌山城へ入城、だが尾根続きの先端部に築かれた山城であったため、ここから東北東約1kmに位置する独立した小山（亀山）に城を移すことになる。城は、山上曲輪と山麓の山下曲輪で構成。山上曲輪は、標高約250mの山頂に、総石垣で囲まれた天守曲輪、それを取り囲むように一段低い土造りの平坦面が設けられ、そこに門や櫓が配され、防備を固めていた。長近は、天正14年（1586）飛騨高山へと転封するため、大野城在城は11年間程であった。長近移封後、長谷川秀一、青木一矩、織田秀雄（信雄子息）らが短期間で城主を交替、関ヶ原合戦後は、結城秀康領となり城代支配が続く。寛永元年（1624）、5万石を持って松平直政（秀康三男）が入封、以後4代に渡って城主を務めた。天和2年（1682）大老土井利勝の三男利房が入封すると、明治維新まで土井氏の居城として存続した。

〈天守の構造〉

長近は、総石垣の天守曲輪を造営し、天守を築き上げたが、3棟が一体化した複雑な形式で、中央部に位置する天守は、天守台を持たず、東西南北4面共に石垣天端に載る面を持っていなかった。安永4年（1775）大火によって焼失、以後天守が再建されるこ



第4図 「大野城石垣并長屋門破損之覚図」(部分)(蓬左文庫蔵)

とは無かった。

天守曲輪上の建物は、中央に大天守、東北に小天守、南に天狗之間があり、西側・北西側は空き地となるが、石垣天端上に塀が廻っている。大天守・小天守・天狗之間の外観は、3棟共に総二階の櫓（一・二階同大）で、桧皮葺と思われる単層の屋根が乗っている。大天守と小天守は、東西棟の入母屋造りの建物であるが、位置は南北に平行にずれている。大天守には、裳階状の腰屋根が見られ、下階は小天守と共に総板張、上階が漆喰となる。天狗之間は、南北棟の入母屋造りで、大天守の平側と軒高を揃え直行する。天狗之間のみ、壁三面が石垣天端上から立ち上がり、最下段が板葺、中央部が漆喰、最上階も漆喰となる。この建物には、3間半四方の化蔵と呼ばれる穴蔵があり、北側に石段が付設する。その規模は、寛延図によれば大天守が6間×7間、小天守が6間×6間半、本丸櫓台6間5寸と見える。本丸の規模は「高サ三拾六間一尺、坪数数千七百歩」とある。

5 総石垣で固めた飛騨松倉城

高山市街地の西南、標高約857m（比高360m）の松倉山山頂に位置する。山頂本丸からは、眼下に上枝盆地を見下ろし、高山盆地も遠望される。城は、越中、岐阜、木曾、郡上へと続く街道を見下ろす要衝に位置し、軍事的な重要拠点であった。

〈歴史〉

城の創築ははっきりしないが、天正7年（1579）頃に、三木自綱によって築かれ、桜洞城（下呂市）を冬城、松倉城を夏城と称したと言う。自綱の父良瀬が永禄年間（1558～70）に築いたとも伝わる。天正13年（1585）三木氏は、豊臣秀吉と対立する越中の佐々成政側に加わった。そのため、秀吉の命を受けた金森長近・可重父子は、南北両方

向から飛騨へと侵攻、自綱は田中城（広瀬城）に籠り、松倉城には次男・秀綱を配した。自綱が破れ敗走すると、松倉城も内応者が現れ落城。秀綱は脱出するも、土民に襲われ命を落としたと言われる。三木氏滅亡により、飛騨に入封した長近は、高山に居城を築き、松倉城は廃城となったと言われている。



第5図 飛騨松倉城推定復元図（考証:佐伯哲也/画:香川元太郎）

〈天守の構造〉

城内各所に残る石垣は、その特徴から天正後半から文禄期（1585～95）に積まれたと考えられ、金森長近が高山に居城した後、街道を見張る要衝として整備したものと推定される。記録には無いが、元和の一国一城令前後までは、領国防備の一翼を担う城として機能を果たしていた可能性が高い。

本丸（東西約24m×南北23m）は、位置及び規模から天守台そのものである。だが、台形を呈した石垣、穴蔵とするには幅狭すぎる石畳、規模の大きさ等、通常为天守建築があったとは思えない。仮に、石垣天端から立ち上がる建築があったとすると、蒲生氏郷の築いた会津若松城七重天守に匹敵する規模である。金森長近が関わったことから、越前大野城同様、複数の建物群が内部に存在し、周囲を塀が取り囲む姿が想定される。規模を見る限り、石垣天端一面を使用した建物は考えにくく、5間とか6間の建物群が接続し、存在していた可能性が高い。

6 特異な本丸構造の飛騨高山城

城は、高山盆地の東側標高約687mの独立丘陵城山（臥牛残）に築かれた山城である。城山西側には、高山盆地を南北に流れる宮川、東側には江名子川が流れ、両河川を天然

の堀として取り込んでいた。

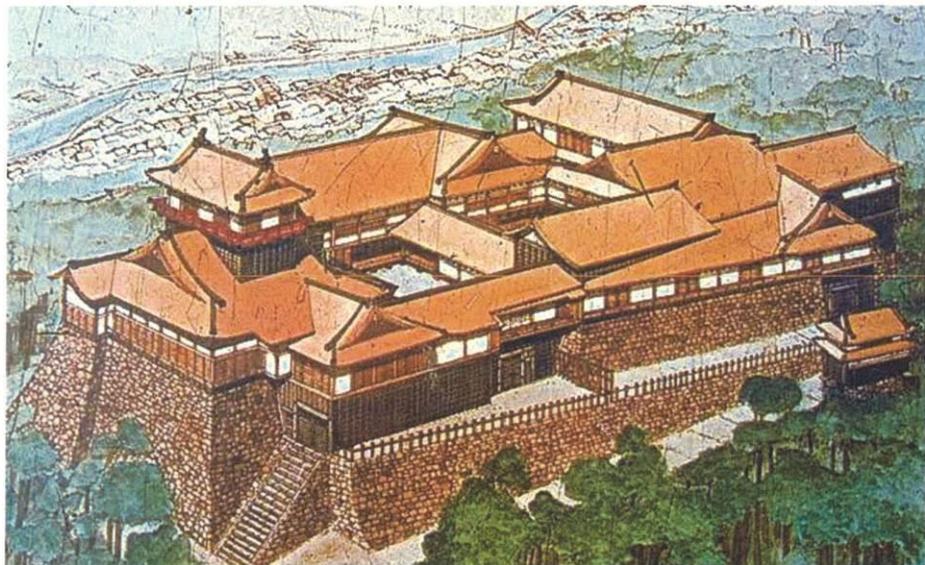
〈歴史〉

城の創築は、文安年中（1444～48）に遡り、飛騨守護代の多賀徳言によったと伝わる。その後、永正年間（1504～10）には高山外記が在城している。

戦国期には、三木自綱が飛騨を平定し、秀吉と対立する越中の佐々成政と同盟、そのため秀吉の命を受けた越前大野城主金森長近に攻められ敗走。翌天正14年（1585）長近は、飛騨一国3万3千石の領主となった。当初、長近は鍋山城（大八賀郷）を居城とするが、同16年（1588）に、高山氏の天神山古城跡への築城を開始する。天神山は、飛騨のほぼ中央に位置し、東西南北へと続く街道が交差する高山盆地を見下ろす要衝であった。長近は、慶長5年（1600）までに本丸・二の丸を完成させ、その3年後には嫡男・可重によって三の丸が整備、完成まで実に18年を要した。その後、金森氏は元禄5年（1692）まで6代続いた後国替え、飛騨国は前田氏預かりを経て、天領となった。城は、元禄8年（1695）に破却されてしまった。

〈天守の構造〉

本丸屋形と総称される本丸に、極めて特異な天守が構えられていた。本丸の規模は、東西57間×南北30間で、折れを繰り返す石垣



第6図 高山城本丸復元想像図（現地案内板より）

で囲まれるものの天守台は見られない。天守は、南西端部に配された東西6間×南北9間の一階（御座ノ間）の上部に東西3間×南北5間の望楼が乗る形であった。外観は二重で内部が3階、2階は屋根裏階となる。例えば、多聞櫓の上に、丸岡城の望楼部が乗るような構造であった。

本丸の構造は、前居城の越前大野城と酷似しているが、天端いっぱいまで建物群が林立し、内部に空き地を配している。大野城築城から10年の間に、城郭建築技術が飛躍的に進歩したということであろう。そのため、大野城のような違和感無く、聚楽第のような御殿建築主体の外観におさまっている。軍事的色彩は影をひそめ、シンボルとしての要素が前面に押し出された城であった。

7 金森長近の養嗣子・可重の居城・飛騨増島城

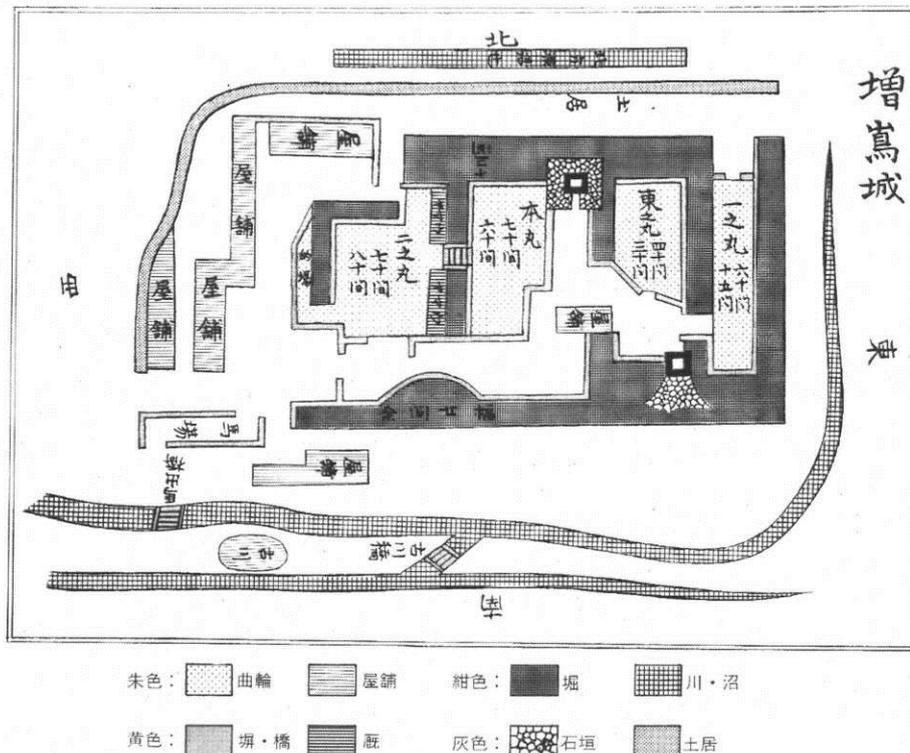
増島城は、古川盆地の中央、宮川と荒城川の合流点近くに立地する、飛騨では数少ない平城の一つである。城が位置する古川の地は、城の南を荒城川が流れ、北側及び東側には沼田が広がる要害の地であった。

〈歴史〉

天正14年(1585)金森長近は、飛騨攻めの戦功により飛騨一国3万3千石の領主となった。長近は、飛騨支配の拠点とするため、同16年(1588)に、高山城の築城を開始する。翌17年(1589)、養嗣子の可重に1万石を与え、築いた城が増島城である。慶長12年(1608)長近が死去すると、可重が高山城へ入り、変わって嫡男・重近が増島城主となった。元和元年(1615)一国一城令によって、廃城となったが「古川旅館」と改称し、金森氏の別邸となった。金森氏が移封され、飛騨国が天領となった元禄8年(1695)、城は高山城と共に破却されたと伝わる。

〈天守の構造〉

本丸北東隅に築かれた総石垣の天守台は、方形を呈す40m程の規模で、天端いっぱいの建物は考えられない。記録がまったく無いため想像するしかないが、高山城の支城であり、しかも子息の城である。高山城同様、石垣内には本丸屋形を含めた複数の建物があり、その中の一つの建物の上に望楼を載せた天守があったとしても、何ら不思議ではない。なお、現存する石垣は、落し積みであるため、江戸後半以降に積みなおされた石垣で、当初の天守台ではない。



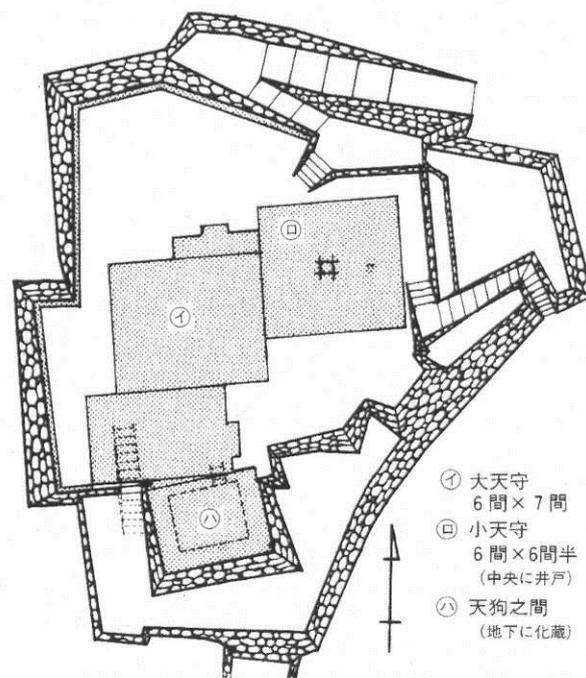
第7図 増島城絵図(『高山城跡発掘調査報告書Ⅱ』高山市教委1988より)

まとめ

「天守台を持たない天守」として、織田政権下、信長に極めて近い位置にいた金森長近に実に4城も築かれている。この他、森氏が金山城、津山城備中櫓で特徴的な天守、櫓を構築している。両者共に、飛騨や美濃を領有しており、この地域の特徴的な形態と考えられなくもない。年代的に見ても津山城を除けば、天正中頃から後半の間（1580～90）に収まる建築である。

建物の特徴としては、巨大な一階、もしくは二階の建物の上に、極めてアンバランスな望楼を乗せていることに尽きる。あるいは、複数の建物が位置をずらして、連続接続する。望楼部は、正方形とはならず長方形を呈し、方形の天守台上の天端いっぱい建てられた天守とは、明らかに異なった印象をもたらす。越前大野城にいたっては、望楼部すら載せない天守で、建物群の最大規模であったため、天守と称されたようである。大野城天守のような、天守曲輪に連続する建物の内最大規模のものを殿主と呼び、後に天守へと変化したことも想定される。

松倉城や増山城に見られる、巨大な天守台を持つ城は、石垣囲みであるものの天守台と言うより天守曲輪と呼ぶべきもので、内部に複数の建物が存在し、その内一番巨大な建物上に望楼を乗せ天守としていたか、あるいは高山城や備中櫓のように一面の石垣を利用し、御殿と接続する櫓を設け、望楼部を載せていたかであろう。金山城が最も考えにくい城で、大野城のようなパターンも、高山城のようなパターンも想定可能である。いずれにしろ、通常为天守とは明らかに異なる異質な建物が建っていたことだけは間違いないと思われる。



第8図 大野城天守曲輪建物推定位置図（『高山城跡発掘調査報告書II』より）